タックルの発生と成立　その 2（ラックの研究）

モールの研究し対策を進める中で、無策に安易にラックを構成することの無駄と反スピード化ということを痛感されたことと思います。立ってボールを持っている状態から、ボールが一旦地上に置かれ停止する状態になることは、プレーの連続流動という点からいっても、スピーディな展開という点からいってもマイナスでありデェメリットばかりです。しかし、連続プレーラックを繰り返してボールを取り続け、相手が対応しきれなくなったところで防御を突破するという攻撃理論があります。それを否定することはできませんが、ラグビーを楽しむという論点に立って展開継続スピーディと面からルール改定の機に新しいルールの意図を生かす視点を探ってみたいと思います。

ボールを持って 1 対 1 の相手に直面したときのことを整理してみましょう。
タックルが発生しない工夫とスキル
- ・フットワークによって相手を避けて突破する。
- ・ハンドオフによって相手を避けて突破したり、味方へのパスだ継続する。
- ・パントで足によるパスの効果を生む。

発生から成立までの多くの選択肢のイメージング
- ・モールの定義確認から捕まっても倒れないボディコントロールでモール構成する。
- ・ハンドラックへ。モールが構成された後、ボールを地上に落とすことによってラックに移行して前進を図る。縦に永いラックは前進力があり防御しにくい。
- ・パスする。immediately に近くのサポーターを 100%生かす。
- ・置く／動かす　ボールを放すだけでなくプレーし易い状態にする。置くのは身体の相手側でもよいし、頭の前でもよい。プレーし易いようにする。プレーするのに十分な身体との隔たりがあるように腕を伸ばした間隔に。

これまでの状況を分析すると、練習の仕方に問題があることが分かります。指導者が、倒れて、ボールを抱えるようにし、その上に味方が倒れ込んでボールを支配し続ける方法を奨励しなかったら、ラック（ラックといえないものもある）は減ることは間違いないところです。プレーヤーにとっても、レフリーにとっても、easier に simpler になることは間違いなく、当然のこととして観客にも分かり易いものになり、プレーが続きスピーディになって面白くなることは間違いない。そうなればラグビー人口が増えることも間違いないのです。そのためにはラックの古い間違った概念を捨てて研究する事が必要です。間違いという言葉が続きましたが、プレーヤーのスタート地点での方向性の問題です。

Rugby is a running handling game. しかし、ボールを持って走ることより、相手に捕まるというイメージから、捕まって倒れるというイメージばかりが膨らんでしまっています。ボールを持って走り回るという競技の精神と、それを志向するルールの意図を顧みないで、ラグビー最大の楽しみ追求よりも、間違った勝利至上主義からぶつかり勝つことを最重要視する誤った指導を、温故知新、修正するべき時です。

2008. 08. 15
西川　義行